メディア活用 戦術も一考

琉球朝日放送報道制作局 次長
仲 里 雅 之

主が少なくなった総合事務局記者クラブ

テレビメディアにとって、総合事務局が縁遠くなってきている。新聞に比べて、ビジュアルな情報(ニュース)を優先するという建前のせいだけではない。公務員にサービス精神を求めるのは、流行になっているが、総合事務局からの情報(ニュース)が少ないのだ。水源情報やら経済指標やらのデータが多く、テレビ的な情報のパイプが詰まり気味。ホームページでご確認をという類の話ではない。当然、年末の沖縄関係予算や公共工事の進捗状況を始めとして、バスの統合問題やタクシー業界への指導などの重要な情報が出ていることも、理解しながらのこと。が、「縁遠くなった」と思うのは、私が駈け出しの記者の頃、当時の総合事務局の記者クラブ（現在も場所は確保されている）に配属されたことを思い出してのこと。遡ること、十八年も前のことでほあるが、当時の総合事務局の記者クラブは、官邸・経済記者クラブの名を持つほど活気があった。　何せ「沖縄と中央を結ぶパイプの入り口」との認識が強かったため、国の各省庁から流される様々な情報が、それこそ毎日洪水のように出てきた。「中央とのパイプ」は、いまなお脈々と続いているのに、失敬な話とお怒りの声も聞こえてきそうだが、もう少し続けると、名物の行政マン（ウーマン）が少なくなった気がする。メディア（テレビに限らず）が情報を取り上げるときに大事だと感じているのは、今、県民が興味を持っていること、リアルに理解できることを伝えてくれる人。そして、場所を共有して欲しいということ（酒の座でいい）。何より楽しいのは、様々な職場で新しい情報や変わった話題、変わった人物を知ることである。マスコミに働く者にとって、人を会して、新しい人と知り合うほど楽しみはない。思いもよらない発想をもって掻き回してくれる公務員と知り合いたい。公務員という立場で、発言が制約されるのも理解している。派手な言動ばかり目立つ人でほなく、地方と中央の間で熱き思いを伝えてくれる人である。沖縄というキーワードを一番知り尽くしているのが、総合事務局の職員ではないだろうか。およそ千人余りの職員がいるというから、沖縄でほ大企業だ。言うなれば、千人のひとりひとりが、国と地方を結ぶフィールド・プレーヤーだ。コスト意識とサービス精神を兼ね備えた地域本位の行政マンを目指して欲しいわけではない。あれもこれもやるのが総合事務局の仕事の範疇だが、様々な分野で政策立案と沖縄の現状分析をしながら、ひとりひとりの個性も見える公務員になって欲しい。職員の意識改革が民間企業でも流行語のように調われるが、あまり責任を背負わず、のんびりムードで、メディアで働く我々とも付き合って欲しい。「公務員としての責任から、ウカツに話が出来ない」「上司に責任を負わされるから、気軽に皆さんと話が出来ない」とかビジネス社会の常套句のような野暮は言わず、ドシトシとテレビにも登場して欲しい。報道系の番組だけでなく、バラエティ番組でもいい。歌番組で自慢の声を披露するのもいい。勿論、得意分野の仕事について、テレビ討論などにも積極的に参加するのも一考では。特に忙しいことで知られる部長クラス以上の官僚の皆さんに是非お願いしたい。県警や那覇防衛施設局の幹部の皆さんに比べると、職員のテレビへの露出が少ないように感じる。以前、お付き台いをさせて頂いた、Y部長という変わり種もいたのが懐かしい。手前味噌で恐縮だが、テレビは活字メディアより優れている点も多い。最近の視聴者は、テレビに依存して情報を収集する傾向が強いのも事実だ。特に、バラエティや討論会やらに出演している人運の表情やパフォーマンスが、出演者の背景にある職場や仕事のことを理解させるシーンもあると思う。テレビ活用戦術を練ることも面白い。但し、メディア規制戦術はお断り。